第3回ふるさと自慢交流大会では、始めに自治会連合会会長の岡田文夫さんがあいさつに立ち、続いてライフスタイル研究所代表の船﨑美智子さんによる講演が行われました。

船﨑さんは、現在、国体ボランティアセンター「きらめきセンター」を山口県から受託し、NPO法人として管理運営する一方で、まちづくりワークショップのファシリテーター（話し合いの中で調整役をする人）としても活躍中です。

船﨑さんは、自身が関わってきた住民が主役の活動を紹介し、協働で行った成果として、「立場の違う人たちが知り合い、お互いの専門性や経験から改善策が生まれた」「他人事から自分ごととして考えるようになった」「自分の住んでいる地域に誇りを持てた」といったことを挙げていました。

また、1本の長いリボンを一人ひとり順に送りながら、会場にいる人全員をつなぐと、

「リボンは人と人とのつながりを表しています。では、今度はリボンを切って、つなぎ直してみましょう。切れたつながり（リボン）をつなぎ直すことで、前より互いの距離が近くなりませんか？」と、地域の絆を改めて築き、深めようとしているみなさんへ応援のメッセージを送りました。

この後、5地区が行った発表では、市長をはじめ、教育長、民生部長がコメンテーターとして参加。

小坂市長は発表を聞き、「みなさんが創意工夫しながら頑張ってくださっていると感じました。住民と行政が共に話し合って協力して事業を進めていくことが、住みよいまちづくりにつながるものと思います。」とコメント。市民のみな

私たちのまち　こんなにええところなんよ

大会では、昨年に引き続き新たに住民自治組織を立ち上げた5つの地区が、5年間の取組み目標を定めた「地域行動プラン」をもとに、組織立ち上げの経緯や、現在展開している取組み状況を発表しました。

様々な本音も飛び出した5地区の発表。喜びや苦労を共有して、地域が一体となるすばらしさを伝えてくれました。

竹原第3地区協働のまちづくりネットワークは、歴史と文化が紡ぎ合う地域づくりに取り組んでいます。大切な町並み保存地区の歴史文化を継承していくため、市と協働して防災資機材や生活道路の整備を行ったり、町並みの雰囲気づくりのために施設の入口に竹飾りを飾ったりしています。

発表者の三藤芳輝さんは、「今も昔もまちづくりを進めるのに大事なのは、『人』。人と人との絆を大切にし、次世代に歴史・文化を継承したいと思っています。」と発表。

今後は自主防災訓練の実施なども計画されています。しっかり住民へ活動の周知をして、多くの人に参加してもらいたいそうです。

竹原第1地区協働のまちづくりネットワークは、「子どもは宝」という思いから、子ども110番の充実など、防犯活動に取り組んでいます。

また、高齢者が安心して暮らせるよう、火災報知機や消火器を地域施設や家庭に取り付け、斡旋するなどの取組みを進めています。ユーモアあふれるかけ合いで発表してくれた中尾泰美さんと升岡博之さんは、「様々な団体で構成されているからこそ、知恵が出てくるんよ。それに、公民館などの場所はなくても人が集まるところがコミュニティ！」と、苦労の中で発見した「良さ」を話してくれました。

さんと行政が共に歩む協働のまちづくりが、一歩一歩、着実に進んでいます。

発表終了後、自治会連合会副会長の脇森智範さんは、

「今後、組織に携わる人がどのように中身を充実させていくかが問われています。地域を良くしていく者同士、切磋琢磨しながら頑張りましょう。」

と来場者に話しました。

今大会には、現在、住民自治組織の立ち上げについて協議している地区や、当面現状を維持する方向の地区の自治会会長も参加していました。

今年度、組織設立を目指す大乗自治会会長の和久利敏生さんは、

「大会名のとおり各地区が地域の自慢を発表されるのを聞いて、うらやましい気持ちになった。ぜひ今後の参考にしたい。現在、『一部の人に負担がいくのでは』など、地域では様々な不安も出ているが、あまり固く考えず前向きに進めたい。」

と意気込みを語りました。

そして、

「自治会長には、情報を住民に提供するという大切な役割がある。今日得た情報も持って帰りたい。」

と、大会への参加が実りあるものであったことも教えてくれました。

また、現状を維持する方向の下野地区大応自治会会長の土田勇さんは言います。

「うちは組織を設立していないが、発表を聞いて『やらないと』という気持ちになった。下野地区は、４つの自治会が一つになるという難しさもあるが、なんとか地域一体となって、まずは地域住民の命に関わる防災活動に取り組んでみたい。」

一人ひとり異なる思いがある中、「自分たちが住む地域を良くしたい」という共通の願いが、少しずつ地域を一つにしていきます。

地域を変えるのは私たち。住みよいまちを目指してがんばっています！

１月30日、勤労青少年ホームで第３回ふるさと自慢交流大会が開催され、５地区が取組み状況を発表しました。

竹原第５地区協働のまちづくりネットワークは、「台風・高潮などの災害対策に課題を抱える地区」と第5地区を紹介。現在、防災活動を中心に、地域の人々が安全・安心に、そして笑顔で暮らせるまちづくりを目指しています。地区の若手ホープとして発表を任された岩崎雅吉さんは、「協働のまちづくりは、結束力と交流、そして第5地区に自信を生みました。自分たちの地域を守るという意識がわいてきています。」と力強く話していました。

「なんとか若者の参加を増やしたい」、「さらに防災事業を充実させたい」という今後の思いも語ってくれました。

吉名町協働のまちづくりネットワークは、防災・自然環境・地域交流をテーマに取組みを進めています。自主防災訓練では、非常食や懐中電灯などを入れる「非常時持ち出し袋」を配布。各家庭が持ち出しやすい場所に保管しており、防災への意識が高まっています。発表者の竹安幸代さんは、「最初は、『協働って何？』『行政の押し付けでは？』という意見も出ましたが、『吉名を良くしようとする方向は同じだから、できることからやろう！』と始めました。現在は、取組みを通して団体や住民とのつながりができています。今後も、楽しみながら輪を広げていきたいです。」と話してくれました。

大井・宿根地区協働のまちづくり協議会は、今年度行った取組みとして、芝生植付けによるいこいのイベント広場の緑化、生活環境の改善として行った芝桜の植付け、子どもから高齢者まで声をかけ合う機会をつくる交流事業、製鉄遺跡の保存などを紹介。発表者の溝手隆章さんは、協働のまちづくりを進めてきて、「悪かったことはなく、良かったことばかり。地域の諸団体が垣根を越えて共同作業ができるようになり、また地区内を良くしようとする人が多くいることにも気づけました。」と話してくれました。

高齢者を支える事業の増加や次世代のリーダー育成などが今後の目標です。